



# 日本語教師の日常



Xun

## 日本語教師ってどんな仕事？

---

「お仕事、何をされてるんですか？」

「日本語教師をしています。」

数年前に自分の仕事を言うと、言われた方は「え?!」という顔をするが多かった。聞き慣れない職業名と「教師」という名詞がつく割にマイナだからだろうか。そこで、説明を加える。

「外国の方に日本語を教える仕事なんですよ。」

その後の相手の反応も、おおよそ次のパターン。

「え!じゃあ、英語とか上手なんですね。」

「日本語?それはお仕事なんですか?日本人なら誰でもできるのではないですか？」

「日本語なんてどうやって教えるんですか？」

私もこの仕事に就くために勉強を始めたときは、できる限り多くの外国語ができた方がいいだろうと思ったし、日本語は母語であるから日本語に関する勉強は特に必要ないと思ったし、自分がする授業は中学校や高校の国語の授業のようなものになるだろうと思った。

結果、私は英語と中国語がちょっと分かるぐらいで、授業の前には文法の辞書やら類義語辞典やらが手放せなくて、学生に文章を読ませて「このときの筆者の気持ちは？」という質問をすることもほとんどない。

少し話がそれるけれど、この仕事をしていると学生からも仕事そのものに対する質問が出ることもある。その質問はたいてい

「先生は高い給料をもらっているんでしょう？」

「今の仕事は楽しいですか？」

「どうして今の仕事を選んだんですか？」

で、上から順番に答えると、残念ながら給料は高いとは言えない。ただ、教える場所や対象によってもらえる給料が大きく違う。給料よりも仕事そのものに職業選択の基準を置く人には向いているし、私はこの仕事をしていて基本的には楽しい。3つ目の質問は答えがやや長くなる。改めて述べるか、また違う機会にしたい。

タイトルが「日本語教師ってどんな仕事？」なのにちっとも内容が分からない。次のページからもう少し詳しくこの職業の内容について可能な範囲で書いてみよう。

## 1日のスケジュール

---

まず、雇用形態によって1日のスケジュールは随分違うでしょう。私は初めて教壇に立ったときの雇用形態は外国の大学の専任講師だった。といっても外国人教員なので会議はなく、研究会や学会に出ることもなく、日本の非常勤講師とほとんど変わらない仕事内容だった。つまり、

- ・ 講義をする（週に90分を9時間）
- ・ 試験を作成して学生の成績をつける
- ・ 学生の面接指導や作文などの添削をする

これだけである。あとは、学生に誘われてたまに出かけたり食事をしたりしていた。生活費もあまりかからない国だったので、本当にのんびりと外国での暮らしを満喫した。

よって、日本にある学校の専任講師のスケジュールとは全く違うと思われる。

日本の専任講師の経験はないので、残念ながら何も分からないが、非常勤講師なら日本語学校と専門学校と大学で経験がある。

まずは、日本語学校。日本語学校に通う学生はほとんどが進学をする。1年生の授業は「あいいうえお」を覚えることから始まるし、全く日本語が話せない、分からない学生がほとんどだ。授業は午前中か午後しかない。学生が多い学校の場合は、午前から午後までの授業を担当させてもらえるので、1日学校にいることも珍しくはないと思う。それぞれのクラスに「担任」の先生が配備されていることもあり、学生の出席管理や生活指導、進路指導をしたり、私がいた学校は教材を選び、授業予定を決め、コピーをするのも仕事だった。

私は2年目で進学クラスの担任になったので、その1年間は本当によく学校にいた。最近の学生は（日本人もそうだと聞くが）先生が調べたり知っている情報よりも友達の情報信じるので、コロコロ進路を変える学生も多かった。担任をしていると、午前または午後授業をして、空いている時間で進学指導や面接指導をすることになる。入試の日は一定の月に集中するから、後期から年末までは割と忙しい。

つづいて、専門学校。

専門学校は日本語学校から学生が進学してくることが多い。大学に入りたかったけれど点数が足りなかったとか、どうしても入りたい大学があるとかいう理由で来る学生が多い。専門学校の場合は、これも学校によって異なると思うが、私がお世話になった学校では授業だけすればよい。授業が始まるまでに学校へ行き、教材を揃え、授業をし、期末に試験を作成して学生の成績をつける。進学指導は多少授業でそれに近い内容を取り上げることもあるが、「進学対策」という名前の授業があるのでその授業を担当しない限り、あまり関係はない。

つまり、非常勤講師ならば、授業が始まる20分～30分前（学校によってこれもちがう）に学校へ着き、授業をし、各学校で定められている書類などの記入をすれば帰宅してよい。

## 非常勤講師の待遇

---

日本語を教師を目指そう、または日本語教師ってどんな仕事だろうと思ったことがある人は、どこかで日本語教師の待遇について書かれている文章を読んだことがあるかもしれない。私も全国の日本語学校や日本語教育機関を調査した訳ではないので、私自身の乏しい経験からしか述べることはできない。ずばり、「高い給料は望めないであろうが、工夫すれば何とかなる。」というのが私が思う日本語教師の待遇だ。

私は大学からずっと一人暮らしをしている。外国での勤務を終え、大学院の修士課程を修了後は某都市の1LDKマンションで生活している。正直、時々少し金銭的に厳しいことがある。非常勤講師は社会保険料や税金などを自分で支払うので、特に大学院を修了した後は支払わなければならない金額が増えて、支払いが遅れたこともある。しかし、基本的に1ヶ月を超える長期休暇（春休み、夏休み）以外はアルバイトのようなことはしていないし、欲しいものが全然買えないということもない（多少はある）。なので、節約するのが苦痛ではないという人でなければ生活が全然できないということはないように思う。

さきほど、日本語教師の1日について、非常勤講師なら授業の時間以外は学校に拘束されることは少ないということを書いた。午前だけ授業を入れてもらえば、もちろん午後からは自由である。ただ、午後から別の仕事ができるかと言えば、私の能力ではできない。なぜなら、授業の準備、宿題のチェック、試験の作成、採点、評価、教材の作成などは個人作業になることがほとんどだからだ。1クラス30人の作文の授業を週に4時間持つと、120人分の作文をチェックすることになる。もちろん、この時間の給料は出ない。日本語教師の待遇が良くないと言われるのはそのせいなのかもしれない。

もう1点、日本語教師を目指す人が心得ておかなければならないことがある。それは、「来年も同じ数の授業を担当させてもらえる保障はない」ということだ。学生数が激減した、自分の授業に対する学生の評価が著しく低かった、学生数は変わらなくても教師が増えた、など様々な理由で仕事がなくなってしまうことは珍しくない。教師になって、慣れてくると授業をきちんと準備しなくても経験から授業をこなせるようになってしまう。そうすると、新米の頃と比べて準備を全部しなくてもよくなる。知らない間に授業の内容や形が固まってしまって、「鮮度」が落ちる。なので、準備が終わっていても学生に合わせて情報を追加したり、内容をちょっと変えるように気をつけている。毎日午後に時間があっても私が副業をしない理由は、不器用という理由が8割ではあるが、授業の内容の鮮度を保つためというのも少しはある。

## 日本語教師になるには？

---

「日本語教師をしています。」というと、たまに「何、それ？私でもできる（笑）」と言われる。率直に結論を言えば、そういう人にはまず無理である。日本語教師になる方法は、日本人学生を対象とした教育機関と比べ、制度が曖昧でルールは無いに等しい。免許もない。大きくわけて次のパターンではないかと思われる。

1. 大学で日本語教師養成過程の講義を専攻または副専攻で受ける。
2. 420時間の日本語教師養成過程を専門学校などで受講する。
3. 1や2を受講したわけではないが、国語の教師の免許があったり、経験がある。
4. 日本語教育能力検定試験に合格する。
5. 友人・知人などに依頼されて

国内の日本語教育機関の場合、1または2が必須条件、4があれば望ましいという条件がほとんどである。専任講師の場合や、選考基準を厳しくしているところは、加えて2、3年以上の経験を求めることもある。3、5は主に海外で教えている先生に多いような気がする。また、4のみで仕事を得たという先生に私はまだ出会ったことが無い。

海外でなら、別に日本語教育について勉強しなくても仕事があるのか、と思われがちであるが、どちらにしても日本語をどのように教えるのかを全く知らないまま教壇に立つのは、現地の言葉が何不自由なく操れたとしても少し不安である。教え始めてから悩んだり、周りの人に相談したりして苦労している先生を見たことがある。では、とにかく1や2を経てからなればいいのか、というとそれだけでは上手くいかない。教師になる方法に制度やルールがないのと同じで、教え方も対象や学校が異なれば変わることが多い。

決して日本語教育界がいい加減なのではない。学校教育のように、ある一定の地域である一定の目標を立て、その目標に向かって指導することができない。クラスの中に、漢字を日常的に使う言語を母語とする学生と、生まれてから一度も漢字を書いたことがない学生と一緒に授業を受ける。ある学生は大学へ進学したいし、ある学生は就職がしたいし、ある学生は自分の趣味のため（アニメを見るやマンガや小説を日本語で読む）に勉強している。クラスに、学生に合わせて、授業の進め方、板書の仕方、話し方を変えなければならない。どんな学生にも通用する方法というのは「あいうえお」の教え方ぐらいかもしれない。

## 初級のテキスト

---

私が日本語教育について勉強をし始めた時、日本語のテキストというのはそれほど多くはなかった。日本語のテキストを買うためには、大型チェーン店のK書店やJ堂に行かなければならなかったし、そこへ行っても大きな棚の1スペースにしか並んでいなかった。日本語教育の出版社と言えば、S社とかB社が有名でほとんどの日本語教育機関が『みんなの日本語』とか『新日本語の基礎』という名前の教科書を初級テキストとして使用していた。現在もこの2つを使用している日本語教育機関は少なくないだろう。

しかし、留学生の増加に伴い、様々な教科書が出版されるようになった。「初級日本語」というキーワードで検索すると色とりどりの教科書がヒットする。教える内容に大きな違いがないのが初級の段階だと思う。教科書に外国語で説明が書かれているものや、各国語の文法解説書があるものもある。学習者を見て一番合うものを選べばよいと思う。大切なことはテキストに振り回されないことである。

初級の授業では、テキストよりも「絵カード」や「文字カード」の方が私は重要になってくると思う。絵や写真は言語での意思疎通が難しい時に非常に役に立つものだ。しかし、気をつけなければならないのは、絵や写真にできない言葉である。初級の教科書の始めの方に出て来て、未だに私が一番教えにくいと感じるのは「不思議な」というナ形容詞（形容動詞を日本語教育ではこのように呼ぶ）。マジックをしている絵カードを見たことがあるが、ある国の学生にそれを見せた時に「マジシャンがマジックをしている」と思わなかったようで、それこそ「不思議な」顔をしていた。

## 中級、上級のテキスト

---

中級のテキストは初級のテキスト以上にいろいろなものが販売されている。初級の学習が済んでいけば、例えば「介護職に就くための日本語」や「ビジネスマンのための日本語」のように各自の目的に応じた学習に切り替えることができる。学習者の目的が1つであれば、それに向かって専門用語や必要とされる技術を教えていけばよい。日本語学校や専門学校で学ぶ学生は進学目的であることが多いので、少しずつ長い文章を読む練習もしていったり、語彙数を増やしていったりした方がよい。大学へ進学するためには「日本留学試験」という試験を受けなければならない大学が多いが、この「日本留学試験」は年々難しくなっている。それにも関わらず、平均点が大きく下がることはない。つまり、それだけ日本語が熟達した学習者が増えつづけているということになる。各種試験についてはまた別の章で述べる。

上級のテキストとなると、今度は逆にあまり多くないように感じる。上級ともなると、テキストを使うより日本人が普通に読んだり聞いたり見たりしているものと同じものを使った方がいい場合もある。さまざまな研究者が研究を行っていると思うが、日本人は日本語を勉強する学習者の日本語が上達すればするほど、学習者への評価が厳しくなる傾向がある。初級の学習者へは「外国人なのだから分からなくて当然だ」という評価であったのが、「上級の学習者なのだから、このくらい分かるのは当然だ」という評価へと変わる。テキストが必要ない訳ではない。中級以上に文法や語彙は難しくなるし、必要なデータや資料がまとまっているのですぐに使える。ただ、日本人が触れている情報に慣れる訓練もこの段階までになると必要ではないかと思う。「生教材」などと呼ばれたりするが、よく使われるのは新聞や雑誌である。特に、「天声人語」などは入試や各種試験にも引用されることは多い。

## テキストを選ぶポイント

---

私はテキストを選ぶのが早い。同じ職場の先生からたまに相談をされることもあるし、後輩や実習生にも「おすすめのテキストがあったら教えてください。」と言われることもある。一応、話を聞いて適当にすすめたり提案したりするが、正直なところ「分からない」。

なぜなら、私がテキストを選ぶポイントは1つしかない。他の先生から「これいいですよ。」とすすめられても、ちっともいいと思わないこともある。失礼なので、一応少しだけそのテキストを使ってみることもあるけれど、使う前から自分には合わないことが分かるし、「失敗したな」と思う授業になってしまう。そのポイントは、教科書をめくって何課か目を通して「授業のプランがすぐに思いつくか否か」である。とても感覚的なことで申し訳ないが、私が授業プランを思いつかなくてもその先生が思いついたなら、それはその先生にとっていいテキストだと思う。

では経験のない人はテキストを選べないのか、というとそれは違うと思う。実際にテキストを見ながら教案を書いて、授業見学に行けばよい。他の先生がしている授業を見学させてもらって、どんな順番でどのぐらいの時間をかけて導入や練習、クラス活動をしているのかメモを取る。その後、自分の書いた教案と比べてみる。そうすると、自分が書いた教案で授業をした場合、「時間があまるかもしれない」とか逆に「時間が足りないかもしれない」という可能性が見えてくる。何度もこれができるのが理想だけれど、見学は学習者にとってもプレッシャーになるので、テキストを使って何度も教案を書いてみるのがいいと思う。教案を書いていくうちに、「これがあったらいいな」とか「これよりももっといい練習はないかな」とか思うようになる。そうすると、テキストを見るだけで「あ、こんな授業になりそうだ」と思うようになる。

もちろん、自分ができストを見て「こんな授業ができる」と思ったからといって、実際の授業もうまく行く訳ではない。でも、少なくとも準備をしているときにはとてもワクワクする。いろんな資料が作りたくなるし、クラス活動を思いつく。教師が楽しくてもしょうがないと思われそうだが、教師がつまらないと思っていることは学習者にとっても絶対につまらないものだと思う。

## 初級の教具

---

テキストの次は「教具」。テキストの章でも少し書いたが、初級の段階ではこの教具がとても重要な役割を果たす。代表的な教具は「絵カード」「文字カード」だろう。絵カードは動詞や形容詞、名詞などが絵で描かれている。人が食べ物を食べている絵を見せながら、「食べます」と「～ます」の形から教える（マス形という）。語彙を教えるのに確実に早い方法に思われるが、絵をちょっと間違えただけで習得してほしいものとは違うものになってしまう。

例えば「寝ます」は日本語の場合、布団に入るところをは「寝ます」と言えるが、眠っている状態の時には「寝ます」というより「寝ています」である。なので、布団に入って電気を消そうとしている絵などが使われる。布団に横たわり目を閉じてしまっている絵は「寝ます」という動詞の導入には使えない。幸い、今までに「寝ます」と「寝ています」のように動詞が変化しない国の人には教えたことがないので、「～ています」を教える時に同じように絵カードを使えば、「寝ます」と「寝ています」の意味をすんなり理解してもらえる。

困るのはそうではないときだ。当然、国によって文化、習慣、使っている言語が違うので、ときどき日本語にはあるけど他の言語にないということがある。「よろしくお願いします」のうまい英訳がないのと同じである。初級の段階では「あげます」「もらいます」「くれます」だろう。あげる、もらうは違和感なく習得されることが多いが、「くれます」のような恩恵が含まれるものはちょっと珍しいようだ。さらに「やります」が加わると大混乱である（最近では日本人でもやりますを使わない人が増えているけど）。

カード以外にも「レアリア」（生教材）といって、実物を授業で使うことがある。携帯電話やバッグ、服の種類（スカートとかシャツとか）は、学習者が持っているものを使ってもいいだろう（但し、服の場合は直接触らないように）。チョコやクッキーのようなお菓子を持っていて、助数詞を教える時に使えば、正解者への景品にもできたりする。

## 中級・上級の教具

---

中級や上級になると、教具はあまり必要なくなる。語彙数が増えているので、語彙の説明に日本語が使えるからだ。私はたまに世界地図を持って行って、文章に出て来た都市名や国を地図上に示すことがある。長い文章なので、ちょっと意識をそらさないと思くなるだろうと思うからだ。

学習者がネットで自由に遊んだりしなければ、パソコンが一番上級者向けの教具だと思う。もう、教具というより学習ツールだけれど。大学などで作成するレポートの書き方や図表、パワーポイントの使用方法などが授業でできる。ただ、設備が必要なので実践したことはない。

中級や上級レベルになると教具やテキスト以上に、テキストの章でも述べた通り、語彙や文法のコントロールがあまりないものを学習者に与えた方がいいように思う。レベルが上がれば、学習者はアルバイトを始めたり、旅行に出かけたりすることもあるので、多少難解で複雑なものでもたまに取り上げてみるといい刺激になる（毎回は無理だし、学習者の負担も大きい）。

最後にテキスト同様、教具を選ぶポイントであるが、最もいい方法は「自作」だと思う。絵カードなら紙の大きさ、堅さなど自分がテンポよくめくり易いものがよい。文字カードも同様である。初級の教具は学校で共用のものが置いてあることが多いので、最初はそれを使ってみて学習者の反応を見るのがよいと思う。中級、上級もいろいろなものを作って授業に持って行くと、学習者の反応も様々で面白い。できる範囲でやってみるとよいと思う。

## 日本語教育能力検定試験

---

日本語に関する試験は、ここ数年で「日本語力検定」とか「話し方検定？日本プレゼン話し方検定？」などがつくられている。日本語にも「英検」やTOEICのような非母語話者向けの試験がある。でも、その前に「日本語教師になるには」でも少し触れた日本語教師を目指す人が受ける「日本語教育能力検定試験」について書いておこう。

日本語教育能力検定試験とは、日本語教師になるために必要と思われる知識を問う試験で、「聴解」と「筆記試験（記述含む）」がある。「聴解」はもちろん、日本語である。「なんだ、簡単そう」と思われるかもしれないが、聴解で問われるのはアクセントの型（頭高とか中高とか）だったり、音を聴いて発音記号を選ぶものなので、少し前から訓練をした方がいいと思う。筆記では、日本語教育史（私が受けたころはよくクラッシュの問題が出ていた）や文法（文章が4つあって、「は」の使い方が違うものは？など）、日本語史（これが一番苦手でした。ロドリゲスとか覚えられない）、留学生のビザや試験の問題（今は就学ビザがないのでビザ問題は出ないだろう）などである。

一番初めに受けた時は、「合格率は18%」と聞いていて、「無理かもな」と思いながら受けた。そして、不合格A（合格ラインに近い順でA～Fにランク分けされる）。3年ぐらい不合格Aを取り続けて、「今年こそ必ず！！」と思って気合いを入れて勉強してから合格した。周りの人に「今年、受けます！」と宣言しておくのと、不合格だと格好わるいなという動機で気合いが入るかもしれない（私の場合は入った）。最近では合格基準が少しゆるくなって、以前より合格しやすくなったようだ。

日本語教師になるために必須ではないと思うが、どこで何の情報に役に立つかわからない職種なので、受けて損はないと思う。受験料が少し高いのが玉に傷。たまに後輩や同僚から「どのように勉強したのか」と聞かれるが、とにかく問題を解きまくるのがおススメ。特に聴解は耳が慣れないとなかなか聞き分けられない。1年に1回しかないなので、日本語教育の勉強をしたらすぐに受けた方がいいと思う。

## 日本語能力試験

---

続いて、日本語を勉強する多くの人が受験する試験「日本語能力試験」。ここからは、学生指導の話で「で・ある体」よりも「です・ます体」の方が書きやすいので、文体を変えたいと思います。名前の通り、「英検」の日本語版です。試験の内容は、聴解、文法、語彙、読解などで、2010年に改訂があり、N1～N5の5つのレベルに分かれています（N1が最も難易度が高い）。今年の7月のN1の合格率が45.9%なので、それほど難関な試験ではありません。ただ、N1になると、「日本人でも滅多に使わないのでは？」と思うような文法や語彙が範囲になります。

また、試験時間が長いのも特徴で、N1は言語知識（文法、語彙、読解）が110分、聴解が60分です（級によって試験時間は異なります）。私が現在教えている学生の中には、アルバイトなどの疲れもあってか、聴解の試験になると寝てしまって、あと5点で合格だったという悔しい思いをした学生もいます。長い試験時間に集中力が途切れないようにする対策も必要かもしれません。

日本語能力試験に合格すると、大学の単位がもらえたり、入試の時に利用できたりします（一部の大学）。また、日本で就職をする場合、日本語能力の証明にもなります。国内では1年に2回（7月と12月）試験が実施されています。

## 日本留学試験

---

続いて、日本留学試験です。一言で言うと、日本の受験者が受ける「センター試験」の留学生版です。科目も、日本語、数学1と2、理科（生物、化学、物理）、総合科目（地理、歴史など社会系）があります。ほとんどの大学がこの試験の点数を入試の出願要件に入れているため、大学進学希望者は1度は必ず受ける試験でしょう。

日本語の試験は、聴解、聴読解、読解で400点、記述（作文）が50点です。記述を除く日本語で300点を超えると、国公立や難関私大にチャレンジする学生がちらほらいます。この試験を作っているのが日本語の教師だけではないので、たまに「こんな難しい内容?!」と思うものもあります（特に聴読解）。年々、学生の日本語力が伸びている証拠ですね。7、8年ぐらい前の試験を練習として授業で使うと、簡単すぎて学生が笑って「こんな簡単な問題、出るはずがない」と言うぐらいです。

これも年に2回ある（6月と11月）試験で、点数は2年間の有効期限（2年はその点数の能力があると証明される）がありますが、最近は年内に受けた試験の点数しか申告できない大学もあります。大学を受ける学生には更にプレッシャーかもしれません。

この留学試験の点数と、在籍している学校の出席率や母国の学校の卒業証明書、成績証明書などを提出して、大学側が用意する2次試験（面接や筆記、小論文、英語など）を受けます。日本人の学生よりも受験シーズンが早めで、11月が1回目のピークです。もう、授業どころではなく、受験を終えた学生に教師も学生も「試験はどうだったのか」「面接はどうだったのか」と質問攻めです。

11月は大学の試験、留学試験、12月は日本語能力試験、年が明けると2回目の大学の試験ピーク、それが終わると学校の期末試験、そして卒業式。まだまだ日本は筆記試験の国ですね。

## 大学入学試験

---

続いては大学入学試験のお話。

11月が1度目のピークであることを書きましたが、学生の意志も大事にしつつ、この時期に1回は試験を受けるのが理想だと思います。留学生の入学試験には面接の試験があることが多く、志望理由書に基づいて先生から質問をされます。

ここで問題になるのが、「志望理由書」です。多くの学生がこれに苦しみます。「なぜ日本へ来たのか」「なぜその大学を選んだのか」「なぜその学部で勉強したいのか」を矛盾なく書かなければなりません。中には、「親のすすめです。」のみで片付けようとする学生もいますが、「意志がない」または「選択する、決める能力がない。」と判断されてしまう可能性もあります。

「来週までに書いてきなさい。」と言って、学生が書いてきたものを見ると、「日本人、男性、30代以上」の人が書いたと思われる文章を持ってきたりします。アルバイト先の店長か、知り合いの日本人に手伝ってもらった（書いてもらった）んでしょうね。「~の所存です」なんて、留学生の若い女の子が使う言葉ではありません。

うまいこと説明ができませんが、人が書いた文章を読む機会が多いと、それを書いた人物がぼんやりと分かるようになります。学生の作文指導などをしているとすぐにピンときます。私でさえそうなのですから、大学の先生になると初めて会った人でもその文章を本人が書いたのか他人が書いたのかは一目瞭然でしょう。人によって話し方にも書いた文章にも「癖」があります。言葉の使い方の「癖」というものが誰にでもあります。

「これ、あなたが書いたんじゃないよね。」と言っても「私が書きました！！」と頑に主張する学生のは訂正せずにそのまま出させますが、大抵面接の時に面接官に「これ、本当にあなたが書いたんですか？」と質問されています。大学側も学生に入ってほしいとは思っているでしょうが、志望理由書もまともに自分で書けない学生はお断りでしょう。なので、心を鬼にして、学生自身に書かせるのが一番学生のためになると思われます。

無事に書類の提出が終わったら、次は面接対策です。先ほども書いた日本へ来た理由、その大学を選んだ理由などの基本的な質問以外に、「最近気になったニュースは何ですか」「あなたの友達が日本へ遊びにきたら、どんなところを案内しますか」のような質問が出たり、「あなたはパソコンで日本語の文書が打てますか」や「英語はどうですか。」のような質問もあります。用意してない質問をされると、ほとんどの学生はびっくりしてしどろもどろになってしまうので、少なくとも3回は本番前に練習をしておいた方がいいでしょう。